

日本山岳文化学会 山岳文化 第一四号 二〇一三年一月

ワンダーフォーゲルの誕生と戦後の登山文化

城島 紀夫

ワンダーフォーゲルの誕生と戦後の登山文化

— 体錬からレクレーションへ —

城島 紀夫

大学のワンダーフォーゲルは、課外活動として戦後に誕生して以来約六〇年にわたってレクレーションの登山種目として活動を続け、戦後の新しい登山文化の一つとなって今日に至っている。

誕生から今日までの発展要因ならびに、戦後の教育制度変更や関連諸施策について考察するとともに、これまでの活動状況の変遷について検証する。

旧制大学と学生登山文化の断絶

「学生登山」といえば旧制の大学、高等学校、高等専門学校などの学生による趣味として行われたものであったが、戦後の学校制度の根本的な変更により数年後には実質的に消滅した。

帝国大学令においては大学の性格を「国家ニ須要

ナル學術ノ理論及應用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」としていた。新制大学の目的は学校教育法で「學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とす」と変更された。連合国の占領政策により、国家という言葉が消去されて共同体意識の根本が失われ、また人格の陶冶という伝統的な言葉も高等教育の目的から削除されてしまったのである。

旧制高等学校の入学定員は、官立大学の入学定員とほぼ見合っており、原則として大学に入学できたので高等学校で行った山岳部活動を連続して行うことが十分に可能であったが、新教育制度においては、

大学入学のための受験競争が激しくなり高等学校からの連続活動はほぼ絶えてしまった。

また、教育の大衆化が重点とされ新興の私立大学が急増した。これらの事情から、戦前の学生登山という文化は断絶したと見ることが出来る。

戦後の教育政策とレクレーション

一九四五年にわが国は敗戦した。翌一九四六年に「社会体育の普及奨励について」という文部省通達が出され、学校体育指導要綱によって戦時中は「体錬科」であった学校体育が、「体育科」に改められた。

運動の内容については、画的、形式訓練的なあり方を排除し、学習者の興味を尊重し民主的・社会的態度を育成するため、徒手体操・器械運動中心の内容から、遊戯・スポーツ中心へと国の体育政策が大きく転換した。この一環として新制大学においても体育が必修科目となった。

一九四九年の大学の体育必修化に伴って体育実技の一つとして採用されたワンダーフォーゲルコースが人気を博してワンダーフォーゲル部（以下、WV部と略記）への入部希望者が急増し、これが大学WV誕生・発展の大きな要因となった。(1)

同じく一九四九に制定された「社会教育法」において、「社会教育は、主として青少年および成人に対し

て行われる組織的な教育活動（体育およびレクレーションの活動を含む）」と定義して、青少年の教育活動を奨励した。一九五五年から一九五九にかけて「青少年団体活動促進」、「青少年野外旅行の奨励」、「青少年野外活動の奨励」と文部省の通達が続ぎ、青少年育成運動が全国各地に興った。

一九六一年に「スポーツ振興法」で「スポーツとは、運動競技および身体運動（キャンプ活動その他の野外活移動を含む）であって、心身の健全な発達を図るためのものをいう」として、野外活動が法律によって定義されて国の文化に織り込まれた。

昭和の大学ワンダーフォーゲル

「一九四〇年代・後半」 終戦後間もない一九四五年九月に明治大学WV部が復活した。自由な組織としての部の復活は、歩行運動（健民運動）などという戦時体制から解放され、新しい体質で登山活動を目指すWV部としての革新的な設立であったと見てよいだろう。続いて慶応義塾大学と立教大学も同様に発足（復活）させ、続いて中央大学と早稲田大学がWV部を新設した。一九五一年に東京大学にお

いて国立大学で初めてのWV部が誕生した。(1) 学生ワンダーフォーゲル連盟も結成された。大学WV活動の創生期となった。

東京大学WV部は国立大学の旗頭として運動会(体育会)に加入を申請したが、二度にわたって拒否された。反対の議論には「運動会は記録を目指している。ワンゲルのように記録を目指していないものは運動部ではない」、「相手に勝つことを目的にしないものは運動部ではない」などが多かった。(2) 一九六一年の三度目の申請で部として認められた。

この時代は、旧来の日本文化や教育に馴染んできた人たちにとっては、レクレーションというものをスポーツの一部として容認する風潮がまだ広まっておらず、体練からスポーツへ、さらにスポーツからレクレーションへ、とその位置づけが移行する過渡期であった。

「一九五〇年代・前半」 経済成長が始まり、レクレーションの普及活動が始まった。大学WV部の設立が全国に拡がり、一九五四年までに関東地区の大学一四校にWV部が創設された。関東地区以外にはまだ設立されておらず、活動内容も登山以外には拡がっていなかった。山岳部は戦前からその多くが日本山岳会に団体加盟していたが、WV部は団体加盟することはなかった。山岳部とWV部とは、互い

会として学生部に手続きすると、学生部は非常に好意的に、大いに励ましてくれた。：体育会にも文化会にも属さない特異な存在として、学内から注目された」との記録が残されている。(4)

新設のWV部は、活動内容を登山ならびにサイクリング、キャンプ、徒歩旅行などとする部が多くなつたが、いずれのWV部も設立の数年後には登山を活動の中心に移していった。

全国の大学WV部において、合宿の後に行われるキャンプファイアー、キャンプソング、スタンツ(寸劇)などが恒例行事となっていた。

「一九六〇年代 (全盛期)」 WV部が全国の大学において関係者に広く認知され、課外活動の一種目として大学文化の中に深く根を下ろした。

高度成長期と呼ばれた年代で、実質経済成長率がほぼ一〇%以上の年が一〇年続き、後にも先にも例がない日本の大躍進時代であった。国民所得が三、四倍にも増え、社会整備が進み、余暇時間も増大して、国民の生活様式が飛躍的に向上・変化した。

一九六〇年代には、高校への進学率が五五%から八〇%に迫り、大学進学率は男子二四、七%へ、女子五、八%へとほぼ倍増となった。技術革新などの影響で大学院博士課程への進学者が増加し始めた。

大学WV部は、多数の新入部員を迎えた。青少年

に強く意識しあっていた。

すべての大学WV部が、設立の直後から部誌の発行を続けたことは特筆すべきことであろう。創生期以来の活動記録として貴重なものとなっている。

「一九五〇年代・後半」 中部・近畿、北海道、東北地方の大学においてWV部設立の波が起こった。

北海道大学、京都大学、福井大学、岩手大学がこれら地区の国立大における創部の先導役を果たし、ほかに一八の大学でWV部が設立された。

京都大学WV部は、一九五六年に探検部と同じ時期に山岳部から独立して発足した。結成趣意書には「本部は、徒歩旅行、山登り、ハイキング、スキーなどをやる事によって自然に接し、美しい大自然の中に我々の魂の故郷を求めようとするものである。山登り、スキーは、現に山岳部およびスキー部があるが、これはスポーツ登山であり、スポーツスキーである。本部が意図するものは、レクリエーションとしての登山でありスキーであり徒歩旅行である」と記されている。(3) 体育会にも文化会にも所属しなかった。

各地でレクレーションが急速に普及していた。

二年後の一九五八年に大阪大学WV部が、大阪ユースホステル協会の行事に参加した学内のユースホステル会員によって創設された。「クラブ結成を同好

時代にキャンプや登山を体験した世代が大学に入学したことの影響であったと見ることが出来る。

部員増加の対応策として全国的に部の組織化が進んだ。大量の部員(一〇〇〜二〇〇名)を抱えたWV部の一部においては、訓練や命令系統が異常なまでに強化されたとの記録が散見される。

この年代までに約三〇の部がワンダーフォーゲル独自の山小屋を建設した。小屋の建設事業がOB会の結成を促し、WV部OB会の設立が始まった。

全日本学生ワンダーフォーゲル連盟が七年間にあつた大規模な全国合ワンを進めていたが、これらの対外活動よりも部の自主的な活動を強く望むWV部が多くなり、一九六六年に解散した。

「一九七〇年代」 部活動の年間計画は、合宿(全員参加)と、パートワンデリング(PW・自由参加)とによって構成され、合宿は、春合宿(新人練成、新人歓迎など)、強化合宿(夏合宿対策)、夏合宿、秋合宿、冬合宿(スキーなど)を恒例とするWV部が多かつた。

これらの他にワーク合宿と呼んで、山小屋の維持保全やOBとの交流行事が行われた。国立大学WV部では、登山活動に重点を置くものが多かった。

この年代前半から現れた体育離れ現象で、体育会に所属する体育系各部には新入部員が集まらなくな

り、一方で同好会が続出した。山岳部やWV部などの各部においても入部者の獲得に苦勞する時代が始まった。合宿の回数や日数を減少させたり、日帰り山行を増やし、並行してサイクリング、海外旅行、川下り、ロードワンダリング(徒歩旅行)などのPWを増加させる部が私立大学を中心に増加した。

平成の大学ワンダーフォーゲル

「一九九〇～二〇〇〇年代」一九九〇年には全盛期に活躍したOBたちの定年退職が始まった。世間では、中高年者を中心とした第二次登山ブームが始まったといわれた。

WV部の部員数は国立大学や私立伝統校では二〇ないし四〇名程度で推移した。

女子大学において、休部や廃部が増加した。趣味の多様化によるものだと言われた。私立大学の中に、新入部員の獲得不調による休部が見られた。

二〇〇〇年あたりから活動歴が五〇年を超えたWV部が現れはじめ、このうち四〇以上のWV部がOB会の助成で『周年記念誌』を発行した。

フォーゲル部が新たに設立された。

これらの現象から見ると、最近の若い人達にとっては「山岳部」よりも「登山部」や「ワンダーフォーゲル部」という名称の方が登山のイメージに近いものとなっているのではないかと考えられる。

まとめ

日本語化した「ワンダーフォーゲル」は借用語であった。戦時中の社会人の歩行運動の名前として使われたこの言葉は、命名した出口林次郎氏がドイツ語の借用であったと証言している。¹⁵⁾

戦後に大学WV部の普及が始まった当時に、山岳部とは異なる登山グループとしてWV部を作った学生たちは、部の名前は二の次にして多数の同志を集めて勢力化することが第一義であったことが幾つもの記録に残されている。その後約六〇年間の社会情勢や生活様式の変化により、大学ワンダーフォーゲルは登山という分野のレクリエーションとして課外活動の中に大きな位置を占めるようになった。

上記してきた経緯は、WV部の生成発展の経過というものが、戦前の学生登山や山岳部の変容として推移したものではなく、新形態の登山文化が誕生した歴史であったということができる。

「二〇一〇年代」最近の大学WV部のホームページに見られる傾向には、次の二点を挙げる事が出来る。戦後六〇年間の我々国民の生活様式の変化や年齢構成の変化が要因となって現れた現象だと考えられる。(一)活動内容を「登山です」と簡明に記すものが増加している。新潟大学、群馬大学、金沢大学などがその例である。(二)「ワンダーフォーゲルとは」という解説文が、短文になりあるいは記載しないものが増えていく。これまでは、ドイツの青年運動とワンダーフォーゲルの発祥伝説を解説し、併せて山岳部とWV部の登山思想の相違点を説明するのが通例であり、山岳部の存在を意識したものであることは明らかであった。

二〇〇〇年代後半から、登山を活動の中心とするWV部の新入部員数が徐々に増加する傾向が見受けられるようになった。この反面、活動目的を多様化し変動させているWV部は、継承すべき伝統の蓄積が行われないために部としての存立基盤が弱体化しつつあるように見られる。

国立大学を中心とした大学院の重点化が始まり、大学院への進学率も上昇している。WV部員にも大学院生が増加しつつあるようだ。

目新しい事柄では、日本山岳会の組織において二〇一三年一月に、青年部、学生部と並んでワンダー

注(1) 城島紀夫「戦後の学生登山の変容」

『日本山岳文化学会論集 第一一〇号』二〇一三

注(2) 『TWVの五〇年』

東京大学ワンダーフォーゲル部 二〇〇一

注(3) 部報『水行末雲行末風来末・第一〇号』

京都大学ワンダーフォーゲル部 一九七一

注(4) 出口林次郎『ワンダーフォーゲル常識』

槇健会ワンダーフォーゲル部 一九三五

【参考文献】

(1) 文部省『学制百年史』帝国地方行政学会一九七二

(2) 城島紀夫「日本ワンダーフォーゲルの起源と歴史」

『日本山岳文化学会論集 第七号』二〇〇九

追加・修正

注(4) 『50年史』

大阪大学ワンダーフォーゲル部 二〇〇九

城島紀夫(じょうじまのりお) 一九三五年佐賀県生れ。明治大学卒、経営コンサルタント。日本山岳文化学会会員(文献分科会、登山史分科会)、日本山岳会会員。